

障害者の職域拡大

～生活介護の利用者が働くために、当事業所が取り組んでいる3年目の報告～

○岩崎 宇宣（相模原市社会福祉事業団 障害者支援センター多機能型事業所 職員）
○杉之尾 勝己（相模原市社会福祉事業団 障害者支援センター多機能型事業所 利用者）

1 はじめに

(1) 発表者の紹介

発表者の岩崎は社会福祉法人相模原市社会福祉事業団（以下「事業団」という。）障害者支援センター多機能型事業所（以下「多機能型事業所」という。）の職員、杉之尾は生活介護②に通う利用者である。

(2) 障害者支援センター多機能型事業所の概要

当事業所は、生活介護①（医療的ケアを含む重症心身障害者）、生活介護②（自身のペースで働きたいと望む、身体障害のある中途障害者等）、自立訓練事業（軽度の知的障害者）、就労移行支援事業（軽度の知的障害者が主）、就労継続支援B型事業（知的障害と身体障害のある中途障害者）、就労定着支援事業を運営している。

(3) 第31、32回職業リハビリテーション研究・実践発表会

第31回職業リハビリテーション研究・実践発表会で、福祉職員だった杉之尾が脳出血の後遺症で、当事者となり過ごす中で、「障害者の権利を守り自分で選択し生活や仕事が当たり前にできるような社会を目指したい」という思いと、その思いをサポートする多機能型事業所での取り組みを発表した。第32回職業リハビリテーション研究・実践発表会では、杉之尾など中途障害者が多く所属する生活介護②の利用者が、重症心身障害者が所属する生活介護①の作業をサポートする業務の中で、仕事に対する新たな可能性ややりがいを持ち、社会での役割を感じるだけでなく、生活介護①の意思決定支援を促進する取り組みを発表した。今回はその後の経過と新たな取り組みの内容を報告する。

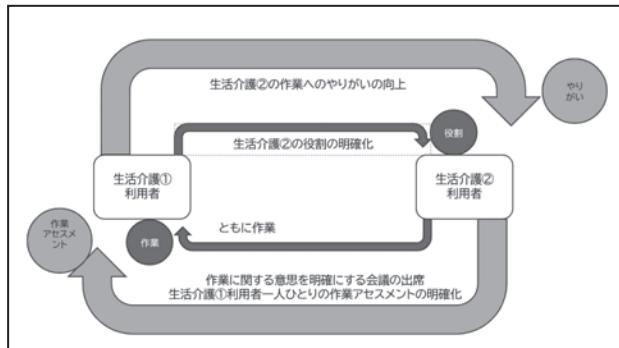


図1 生活介護①と生活介護②の関係図

2 利用者が主体となる取り組みの設定

(1) 作業支援会議

生活介護①利用者が作業をどのように思っているか意思

を明確にすること、生活介護②利用者が主体的に関わること、自身の役割を明確にすることを目的に、作業支援会議という生活介護②利用者と職員が検討する場を新たに設置した。

(2) 生活介護②利用者懇談会

生活介護②の取り組みの一つである、月1度開催している利用者懇談会という利用者が主体となり活動や日々の事を話し合う場で、生活介護①利用者の作業の様子を共有し検討した。その際、名前と顔が一致しにくい利用者のために、利用者の顔写真カードを用意したり、生活介護①の担当職員も出席し日々の様子を共有した。話し合われた内容は作業支援会議で杉之尾が報告しさらに検討を深めた。

3 作業に対する意思の考察

(1) 作業記録①

作業に対する意思を考察するため、作業記録をつけることとした。CD・DVDの分解枚数を記載する項目以外は、生活介護②の利用者から多面的な考察がでることを目的に、選択式でなく記述式（図2）を主とし、自由な分析や感想を募った。また比較的表出がくみ取りやすいと思われる生活介護①利用者2名を記録対象者で選出し、2週間記録し振り返ることとした。生活介護②利用者が自身の役割を意識すること、生活介護①利用者が特定の支援者に対し日々どのような表出になるか把握することを目的に、支援する生活介護②の利用者は固定で担当制とした。

2週間後に振り返った結果、分解した枚数からは大きな変化なく、作業意欲を考察するには至らなかった。要因として提供する枚数や提供方法などに関し統一的な対応ができなかつたことが考えられた。記述部は「一生懸命やっていた」「楽しそうだった」等の自由な感想があるが、生活介護②利用者から詳細な分析や感想を記述することが難しいとの意見があり項目を見直した。

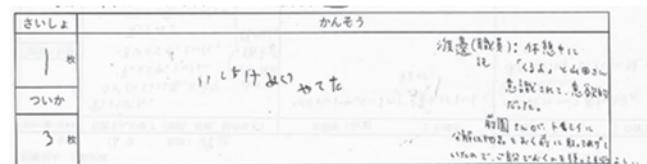


図2 作業記録①

(2) 作業記録②

前回の振り返りを踏まえ、「こえかけ」「〇〇さんのよ

うす”という項目を追加し、内容を対象者ごとに変え個人の表出に合わせた項目に変更した（図3）。また生活介護②の利用者は該当部に○をつけ、該当しない部分は職員が補助し記述することとした。生活介護②利用者から、自身の考察を反映しやすいと新たな書式に対し感想があつた。

さいしょ	こえかけ	まえぞのきんのようす	かんそう	そのほか、きづいたこと (しょくいんまにゅう)
1 横	「うまいですね」	わらっていい 声を出していた	よくしゃべりな かみしかか	
ついか	「いいですね」	がんばっていた AKB48の衣装がなくて やる気アップして いた		
3 横	「ありがとうございます」	下を向いていた。		
	「笑つかれました」	びんきがなかった。		

図3 作業記録②

4 リーダー職を担う利用者の気づき

生活介護②は、大きく分け4つの取り組みを中心に行つておらず、1つ目は受注作業、2つ目は他利用者のサポート、3つ目は来客者や外部へ自分たちの活動の紹介、4つ目は娯楽活動に取り組んでいる。その中で杉之尾は利用者リーダー職を担っており、他利用者のサポートの一環で、生活介護①の利用者が作業しやすいよう職員と共に考えてきた。しかしリーダー職とそれ以外の利用者とでは、生活介護①のサポートに対する温度差があり、この取り組みに対し理解を得るにはどうしたらよいかリーダー職として課題を感じていた。

しかし今年度から始まった作業支援会議や作業記録などを通し、消極的だった生活介護②の利用者が、対象者がくると自身から周りに声をかけサポートを促したり、対象者の好きなアイドルCDやDVDを用意したり、作業支援会議や利用者懇談会で発言があつたりと変化が生まれた。また対象者を知ることで嬉しい、喜んだ笑顔が見られて嬉しいといった感想があり、取り組みの意義を少し感じてきた様子がうかがえた。

5 生活介護①重症心身障害者の変化

対象者2名の内、1名は発語がなく口鳴があり、指差しや首の傾きなどでコミュニケーションをとる生活介護①利用者Aさんと、単語での発語はあるが乏しく、時折内容と気持ちに相違がある生活介護①利用者Bさんという2名を対象とした。両名共にCD・DVDを入れる箱を用意し、初めは1枚箱に入れ、追加の際は再度箱に職員が入れる事とした。Aさんは、作業への参加の意思を聞くと頷いたり、手をあげ参加の意思を示していた。開始当初は興味のあるCD・DVDを分解せず、分解をしても仕分箱に入れず自分で持っていた。取り組みを進めていく内に、分解した物を仕分け、追加の際は自分で箱を持って追加するよう要望するなど変化がみられた。家族からは、本人が仕事しお金をもらえるとは思っていないかった。この仕事は本人にとって

天職だと思うと感想があった。しかし作業期間中、体調の悪化で入院となり予定した期間の作業はできなかつた。Bさんは、作業時楽しそうな反応が多いと記録に上がるが、楽しそうとはどのような反応か具体的に考察したところ、表情での反応が多く笑顔が楽しい反応のようだという考察に至つた。また作業で関ることが多い、生活介護②担当利用者の時は、笑顔が多く楽しそうだという意見があり、関りの中で「いいですね」「ありがとうございます」などの声をかけていることが要因の一つではないかと意見があつた。そのことからBさんは他者との関りは嫌いではなく、関りの中で賞賛の声などプラスの声をもとめているのではないかと考察があがつた。しかし考察内容は実際の作業を通したものではなく、他の要因も考えられることから、今後は作業に対する反応か作業に対しどのように思っているか記録することとした。

今回記録対象ではなかつた生活介護①の利用者にも変化があり、作業室に入ることを拒否していた利用者が、作業回数を重ねることで分解や仕分け作業を自身から取り組み始める様子がうかがえ、その様子から片付けが好きだと言う事前情報と繋がり、本人の作業する役割を明確にしていくことでより意欲的に繋がっていくのではないかという考察や、実際に作業を体験していくことが理解に繋がるという新たな気づきがあつた。

6 今後の課題

生活介護①重症心身障害者の作業に対する意思を明確にするにあたり、支援者が提案し伝える上で、実際に体験してもらうことが理解に繋がつたこと、意志の表出は1人1人異なっていることなどの気づきがあつた。今後は表出が実際の作業に対する反応かを深めていくことが、その先の意思決定に繋がるのではないかと考えた。

生活介護②中途障害者はこの取り組みを通して、他者をサポートするという役割にやりがいを感じ始めている様子がうかがえた。今後生活介護②の利用者がより主体的に関わることができるよう多機能型事業所にて取り組みを進めていく。